

イキイキ 現場レポート

医療法人 永広会 八尾はあとふる病院

〒581-0818 大阪府八尾市美園町2丁目18-1 TEL 072-999-0725 FAX 072-999-0180
http://www.heartful-health.or.jp/yaohp/yaotop.htm

チームだったから突き進めた～「就労支援チーム」の取り組み～

もし自院で、意義があるのは確かだけれど、直接的な収益に繋がりにくい取り組みをしたいとの声があがったらどうしますか？



就労支援チームの方々

上左から 金谷氏 (PT)、松原氏 (相談員)、保田氏 (OT)、植野氏 (OT)
下左から 武平氏 (OT)、西端氏 (ST)

理念

私たちは、その人がその人らしく自分の人生を全うすることを
Warm Heart:心 Cool Head:知識 Beautiful Hands:技術 で支援します。

就労支援チーム

医師、相談員、理学療法士、
作業療法士(3名)、
言語聴覚士(2名)
合計8名

これまでの実績(30カ月分)

対象患者: 41名
主な疾患: 脳卒中などの脳血管
疾患(高次脳機能障がいを含む)
復職達成者: 16名

診療科目

内科・整形外科・リハビリテーション科

病床数

119床(回復期リハビリテーション病棟59床、介護療養病床60床)

在宅復帰支援サービス

外来リハビリテーション、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション、
介護サービスセンターはあとふる(居宅介護支援事業所)

病院概要

「就労支援チーム」結成のきっかけ

脳血管疾患により障がいを残し、生活には復帰することができた方であっても、社会に出て仕事ができるようになって初めて、「本当に復帰できた」と感じられるのではないのでしょうか。ことに仕事を持っていた方が発症した場合はなおさらです。しかし、医療機関でのリハビリは生活復帰を目標にしていること、そして、入院期間や外来リハの算定日数上限の関係上、就労支援までを医療機関の業務と捉えるには難しいのが現実です。

八尾はあとふる病院の「就労支援チーム」はセラピスト同士がこの悩みを持ち寄ったところから始まった現場発信のチームで、患者の復

職・就職までをサポートしています。

「就労支援チーム」の取り組み

「就労支援チーム」の関わりは、転院前より始まっています。まず、相談員の松原由佳氏が転院前の急性期病院へ向かい、基本的な情報と一緒に復職希望があれば、休職期間や復職における会社側からの条件などを併せてヒアリングし、それをチームで共有します。「入院・外来の期間が決められているだけに早めの情報収集は非常に大切です」と松原氏は話します。

対象者は脳血管疾患の患者であり、入院初期は機能低下した重症患者が大半のため、まずは、生活復帰を目標としたリハビリから始めます。

ます。その時間があれば、他の患者へ何単位のリハビリができるでしょうか。

作業療法士の武平孝子氏は「確かに、対価のない活動が続けることに葛藤はつきものでした。しかし、理事長の『高次脳機能障がいを持った方々であっても社会参加し、働けるよう支援ができるチームとして、もっと本気の実組みをしてくれ』という言葉から、経営側が厳しい環境の中でも私たちチームを応援し、育ててくれているということを理解していましたので、これまで進んでくることができました」と語ります。

もう1つ、チームの推進力を支えたのは、団結力でした。金谷氏は「このメンバーだったからこそ、逆風が吹く中であっても大丈夫という想いがありました」と振り返ります。

チームの想いに引っ張られ実績が付いてきた頃、次のステップとして、積み上げた実績の発表を行いました。まずは、院内発表、続いてリハビリテーション・ケア合同学会での発表を行いました。この学会発表では優秀演題に選出され、院内外でチームの活動が認められました。

今後について、松原氏、武平氏はともに「障が

い者を受け入れ、支援してもらえる連携先をもっと増やしていきたいです」と抱負を語ります。また金谷氏は「この活動を多くの医療機関に知っていただき、回復期リハ病院であっても就労支援ができるということ、その上で、医療と介護のように医療と福祉という面でも連携による報酬が創設されるための取組みを行っていきたいです」と先を見据えて話します。

就労支援は決して収益的なプラスを生んでいるわけではありません。しかし、チームのモチベーションは高く、それに感化され他の医療スタッフにも活気が満ちています。また、「八尾はあとふる病院は復職に向けて、必要なリハビリメニューを医療スタッフがどんどん考えてくれ、復職・就職をサポートしてくれる」という評価が広まれば、社会復帰を望む患者は、八尾はあとふる病院を選ぶはずで

むすびに

目の前だけのプラスではなく、患者に本当に必要と思われることを提供する。これが質の向上へとつながり、患者・地域から信頼され選ばれる病院へとようになっていくのではないのでしょうか。

そしてもう1つ特筆すべきことがあります。それは、この取組みがボトムアップ方式だったということ。トップダウンではなく、職員が患者に必要なことを一生懸命に考え抜いた末に行きついた道であったということ、だからこそ、病院側も厳しいけれど、温かいまなざしでチームを応援し、それに応えたいという想いがチームの成長を後押ししたと感じました。

(原田 有理)

左から金谷氏、松原氏、武平氏